

学位請求論文要旨

持続可能性日本語教育に基づく「日本概況」の授業研究
—中国の大学日本語教育における教室実践から—

2022年12月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

林 瑛

本研究は、中国の大学日本語専攻における「日本概況」授業の改善に向けて、持続可能性日本語教育を「日本概況」授業に取り入れ、実践を行い、その結果の検証を踏まえて、持続可能性日本概況教育を提案し、教育現場への示唆を得ることを目的とする。そのため、まず「日本概況」授業改革を目指して実践が展開されている授業の現場を観察した。そこで、学習者の活動参加の実態を探り、先行研究で提示されている改革が日本概況教育の改善にはつながっていないことを確認した。それを踏まえて持続可能性日本語教育を導入して「日本概況」授業をデザインし授業実践を行った。そして、その授業の受講生がどのように授業に参加しているか、その参加の様相から、持続可能性日本語教育としての「日本概況」授業で、受講生がどのような学びを経験しているかを探った。グループ議論をデータとして談話分析の手法を使って分析した結果、受講生は、日本社会を参照点にして自分の生きる社会に対する深い理解と持続可能な生き方の二つを能動的・主体的に追求していることが窺われた。さらに、受講生のこの授業に対する認識を探るために、受講終了後に半構造化インタビューを行い、KJ法を使って授業に対する受け止め方を探った。この研究3も加えることで、受講生にとってのこの新たな日本概況授業の意味をより明確にできたと考える。本研究は以下の8章から構成されている。

第1章の序論では、日本語学習者を取り巻く社会環境および中国における日本語教育の現状と課題を示した上で、従来の「日本概況」教育が、変動が激しい社会における教育としては限界があることを述べた。特に、中国の教育改革により、「応試教育」（試験教育）から「素質教育」への転換が求められるようになってきているが、教育現場では、まだ従来の教師主導の知識詰め込み型の教育が行われており、「日本概況」授業も例外ではない。「日本概況」授業では、日本の歴史、地理、経済、政治など学習者と直接的な関連がない内容を教師から一方的に教えられるため、学習者も授業内容と自分と結びつけて学ぶことができず、「日本概況」授業を単位のための授業として捉えられていることが多い。中国の日本語学習者を取り巻く社会はグローバル化の進行の下で激しく変動している。こうした変動する社会をどう認識し、どう生きる指針を立てていくのか、それに対応する教育が必要になっているが、「日本概況」の教育現場ではそのような教育の追求離されていない。このような現状の克服として、持続可能性日本語教育の導入の可能性を提示した。

第2章では、本研究の理論的枠組みである言語生態学を提示した。言語生態学では言語生態と人間生態を一体のものとして捉える。言語生態の良さ(wellbeing)と人間生態の良さ(wellbeing)は相互に関連しあい、相互交渉関係にあると考えられている。本研究の基盤となる持続可能性日本語教育はこの言語生態学に依拠する言語教育における生態学的アプローチとして具現化されたものである。持続可能性日本語教育では、学習者が生きる上で直面する課題をめぐって一人で思考を深めるとともに、さらにその結果をもちより仲間と議論することで、課題に対する解決の方向性を模索することを可能にする。学習者は日本語学習と並行して自分なりの生き方について考えることが実現できる。これは、言語活動が人間活動を支えていることを意味し、言語生態も人間生態も保全されているとされる。本研究が考察の対象とする「日本概況」の授業においても、日本の歴史・政治・社会などを手掛かりにして、自分が生きている社会を自分の生きることと関連付けて学び、自分の生き方についても考える場とすることができると期待される。

第3章では、まず、「日本概況」授業における先行研究を概観した。先行研究では「日本概況」授業の問題点として教師による一方的な教え込みにより学習者の受け身的な授業参加が指摘され、その解決策としてメディアの活用（教授形態上の改善）や日本概況がカバーする知識をカテゴリー化する（内容上の改善）などが提案された。そして具体的な授業デザインもあげられた。しかし、提案や授業デザインは、全て教師がどのように授業を展開するかに偏り、学習者はどのように授業に参加するかについては注目されない。さらに、先行研究の殆どが提案に留まり、実践に移して提案の検証がなされていない。そして、実践に移された研究においても授業デザインの説明とそれがどのように教師によって実施されているかの説明に終始し、学習者が授業にどの

ように関わっていたかについての報告がなされていない。さらに、実践授業ではデータをとって分析していないため、実践の成果を判断することが難しい。また、中国における持続可能性日本語教育の実践研究を概観した結果、全ての実践はスキル科目で行われ、話す・書く・訳す能力の向上に重点が置かれている。しかし、日本概況授業はこのようなスキル科目と違って、4 技能の向上ではなく、どのように日本の概況に関する知識を学ぶか、そして、どのように日本社会についての知識を深く理解するかが問われる。こうした日本社会に対する理解と持続可能な生き方の追求が同時に達成されることが目標となる。しかし、作文テーマに対する深い理解への到達、あるいは思考の深化が母語を使った資料収集や仲間との議論によって促進されることを示した劉や秦など、持続可能性日本語教育の実践研究は大いに参考になると考える。

以上の先行研究を踏まえて、本研究の研究目的を達成するために、次のように、三つの研究課題を立てた。

研究 1:「日本概況」授業改革の実態

課題 1: 教師は授業をどのように展開しているか

課題 2: 受講生はどのように授業に参加しているか

研究 2: 持続可能性日本概況教育としての「日本概況」授業の展開

課題: 受講生は持続可能性日本概況教育としての「日本概況」授業にどのように参加しているか

研究 3: 持続可能性日本概況教育としての「日本概況」授業に対する受講生の評価

課題: 持続可能性日本概況教育としての「日本概況」授業を受講生はどのように受け止めているか

研究 1 では、「日本概況」授業の諸問題を改善するために先行研究で取り上げられている提案が「日本概況」教育の現場ではどのように実践に移されているか、改革の実態を検証する。研究 2 では、持続可能性日本語教育を導入して「日本概況」授業をデザインおよび実施し、受講生はどのようにこの授業に参加したか、その参加の様相を探る。研究 3 では、受講生がどのようにこの授業を受け止めているか、受講生の授業に対する捉え方を明らかにする。研究 2 は受講生の授業におけるパフォーマンス(行動)から、研究 3 は授業に対する認識から、それぞれ受講生における学び方の転換が達成されていたかを探るものであり、行動と認識の双方から検証を目指す。

第 4 章の研究目的と方法では、まず、本研究の目的及び課題を提示した。次に、実践のフィールド、データの収集と分析方法などについて詳しく説明した。

第 5 章(【研究 1】)では、先行研究であげられた改革の授業が展開されている日本概況の現場をフィールドとして、授業観察を行って、学習者の活動参加の実態を探り、先行研究で提示されている改革が日本概況教育の改善につながるかどうかを検討した。

まず、中国の M 市にある S 大学の「日本概況」授業をフィールドとした。M 大学の「日本概況」授業の担当教師曹(仮名)は「日本概況」授業に長年携わり(13 年)、実践研究も多く行っている。曹は教材内容の編成、学習者の授業参加という点で、「日本概況」授業の問題に気づき、それを改善するため、従来とは違う曹独自の授業のデザインと進め方で授業を展開している。まず、教科書にある多くの知識項目から関連がある内容を集めて一つのカテゴリにし、合計 4 つのカテゴリ(①日本列島とその風土、②日本の政治と歴史、③日本の経済と科学技術、④日本の現在の生活)に分けた。さらに、記事やアニメなどの補助資料も取り入れた。また、従来のような、90 分の授業を全て教師の講義で使うのではなく、「学習者の主体的な学びを促す」として、グループ活動の時間を設けた。このグループ活動は、議論と発表から成ることを決めただけで、何を議論しどういう形態で発表するかはすべて学習者に一任された。しかし、教材の内容をカテゴリー化しメディアを多用して授業を展開したにも関わらず、結果は、教師の講義がむしろ長くなり、授業時間の大半を占める結果となった。また、曹は、グループ活動を取り入れて、学習者が議論

を通して考える、自律的に学ぶなどを期待した。しかし、実態は、教師の長い講義が終わったあと、残りの少ない時間でグループ議論をさせることや、学習者に丸投げするような教師の関わり方により、学習者はより簡単で省力化した発表の仕方を追求してしまい自律性や思考の深化はみられなかった。以上から改革授業を観察した結果、問題解決に向けて実効性をあげていないことが分かった。

第6章（【研究2】）では、まず、持続可能性日本語教育の実践研究を特に授業デザインの点から検討し、それを参考にして、導持続可能性日本語教育を導入した日本概況の授業デザインを行った。日本概況授業の改善のカギは、知識の学びを自分と関連付けた学びとすることであると考える考えから出発した。二重の目標を設定した。日本社会を知ることと自分の生きることとを繋げて考えることでそれぞれの理解や追求が深くなると考えた。が促される。換言すれば、日本社会を知り理解を深めることと持続可能に生きることの追求という二つの目標を設定した。持続可能性日本語教育の先行研究でその意義が検証されている〈事前課題、授業での議論、振り返り〉を活動の基本に置き、教師の使う時間を減らし、授業時間の多くを学習者が使うことを重視した。

中国の黒龍江省のS市にあるM大学の日本語専攻で、希望者を募り、放課後の時間を使って5回の実践授業を実施した。6回の「日本概況」授業実践からデータを収集し、受講生の授業への参加の様相を探り、以下の三点から結果と考察を述べた。

- (1) 一つながりの活動としての〈事前課題→グループ議論→振り返り〉、
- (2) 社会の構造的理解を促す繋がり の図作成活動、
- (3) 思考の深化を促すグループ議論の三点から述べた。

受講生は、従来の受け身的な授業参加とは大きく異なり、積極的・主体的に授業に参加していることが分かった。即ち、受講生は、積極的に事前課題に取り組み、その成果を携えて授業中のグループ議論に参加し、そこでの議論に対する自分なりのまとめを授業後に振り返りとして書くという授業参加の基本形ができていた。また、受講生は授業中教師の解説を聞く代わりに、小グループになって自分たちで問いを発し、その問いの答えを求めて仲間と議論をし、その議論から自分なりの答えを得る形で学習を進めていた。事前課題は教師から課されたものではあるが、受講生は、宿題や単なるウォーミングアップという位置付けではなく、自分がどのような社会に生きているかを知るための貴重な手がかりや、仲間との議論を活発にするための起爆剤を得る機会として活用していた。事前課題で収集した手掛かりは、小グループでの仲間との議論の中で、検討され、吟味され、テーマを理解するための不可欠の素材として機能していた。そして扱われる日本概況の知識は学習者の生きることと関連付けられていった。

第7章（【研究3】）では、学習者が、持続可能性日本語教育としての「日本概況」授業をどのように受け止めているかを探るため、コース終了後、実践に参加した11名の受講者に対して半構造化インタビューを行い、文字起こししたデータに対してKJ法を使って質的に探った。その結果、受講者は新しい「日本概況」授業を自分の生きることと知識の関連付けを重視する授業として授業を認識していることが分かった。具体的には知識の内容を自分の生きることと関連付けながら、グループになって仲間とたくさんの議論をするような授業、また、振り返りの記述とつながりの図を作成する活動を含めて、それらは受講生にとって、これまで経験したことのない新奇な授業である（①【初めて経験する授業】）。この授業の新規性は、自分たちの生きることと結びつけられる内容にある。つまり、〔心に刺さった知識〕を通して、まず、自分の立場を再確認し、そこから物事の多方面に意識に、〔多面的に考えるようになった〕と言っている。そして、自分と関連する内容の学びから、〈知識欲が満たされた〉、〈思考力がついた〉、《知識が日常生活を変えた》など一連の収穫を得たことが分かった。そのおかげで授業は受講生にとって学び甲斐のある授業となった（②【生きることを内容とした授業からの収穫】）。また、新規性のもう一つの側面である、授業中の多くの時間が使われたグループ議論では、受講生にとって新

たな発見や多くの気づきが得られ、達成感が感じられる授業となった（③【仲間とのグループ議論を通して達成感を感じた授業】）。具体的には、「心に刺さった知識」を巡って「良い議論のもとで知見が広まった」だけではなく、「交流を通して客観的に他人の考え方を知ることができる」と言った。さらに、「議論を重ねることで得られた達成感」や「発表は自分を成長させる」ことになり、「グループ議論のやり方が好き」だと言っている。それで、好きな授業に、授業中でも、授業の後でも、積極的に参加し、④【参加度がたかった授業】として捉え、授業での学びがコース終了後にも続いていたことが分かった。以上から分かるように、この授業は、学習者の参加度の極めて高い授業であった。ただし、改善点が全くなかったわけではなく、「振り返りは負担があるため、積極的には書かないこと」や、「<学生が調べた内容を確認してもらいたい>などの改善点もある（⑤【本授業の課題】）」と認識している。

以上から分かるように、受講生は従来の教科書から学ぶ知識項目と違い、その知識を受講生と結びつけ、自分の生きることと関連がある知識を学ぶことによって達成感や収穫がある授業だと捉えている。さらに、「日本概況」授業は内容科目であるため、日本に関する知識を学ぶことも重要である。新しい「日本概況」授業で取り扱った知識を受講者は「心に刺さった知識、受け入れやすい知識」として捉え、そこから、「<知識欲が満たされた>点においては、内容科目で問われる知識の獲得もできたと言える。さらに、「自分の生きることと知識の関連付けを重視する授業」で、「心に刺さった知識」をめぐる仲間と議論を重ねていくことで、仲間と意見交換ができた。また、議論を通して知見が広まるほか自己成長ができたことから達成感を感じている。そのような授業は受講生の学習意欲を引き出し、授業参加度につながった。そして、その影響がコース終了後も続いていたことが分かった。すなわち、新しい「日本概況」授業での学びを通して、受講生は知識面でも生活面でも獲得があったという認識を示すことができる。さらに、王（2019）の研究から持続可能に生き方の追求を内容とする持続可能性日本語教育をスキル科目だけではなく、内容科目に導入する可能性も見えたと言える。

また、従来の「日本概況」教室では、教師と学習者、学習者同士は交流がないため、授業では学習者のことばが十分機能されたとは言い難い。したがって、言語生態が悪かったとも言える。そこで、本研究では「日本概況」授業の言語生態を保全するため、言語生態環境にある心理的領域と社会的領域の相互交渉による言語を活性化させた。具体的には、学習者と関連がある4つの内容を取り入れ、事前課題（心理的領域）、授業でのグループ議論（社会的領域）、振り返り（心理的領域）と取り入れ、心理的領域と社会的領域の相互交渉を通して「日本概況」授業の言語生態環境を保全した。

第8章では第5、6、7章で述べた三つの研究で得られた結果をまとめ、それを踏まえて現場に対する示唆を以下の4点から述べた。

- ①内容科目における持続可能性日本語教育の可能性を提示、
- ②学習者主体の「日本概況」授業の可能性を提示、
- ③実証研究のモデルの提示、
- ④持続可能性日本概況教育の構築

最後に本研究の限界と今後の課題を示した。今後の課題として、以下の3点を挙げた。

- ①教師はどのように授業に関わっていたか、
- ②内容の精選と精緻化、
- ③教室活動の改善